



月のヒカリ

VI

著：モカ

絵：Nanaha



Konoha Hikari
木ノ葉 ヒカリ

高校2年生になったばかりで、性格は真面目で明るい性格、弓道が得意。

2年前父親が再婚し家族が増え今は両親と兄との4人暮らしだがヒカリは家族に馴染めずいつも孤独を感じている。

学校の弓道場で矢を放ったさいに不思議な光に導かれ異世界セブズドアに迷い込む。



Geluka
月下

髪の色は黒で少し幼さが残る顔に緋色の瞳がとても印象的な龍神人の青年。

闇を抑える不思議な力を持っている。

ヒカリの前では冷たく接しているがいつも気に掛けている。



Zin
ジン

とても元気で明るい少年。

ラオスの兵士で、ユーリスとの国境を監視する城の副官をしている。ある事件を切っ掛けにヒカりに命を救われヒカリと行動を共にすることに・・・。



Rou Taiga
狼 大河

狼家の当主で、面倒見のいいお兄さんの存在、月下を主としたいつも影ながら見守っている。武に長けていていて国の警護を任されている。



Rin
リン

城でのヒカリの教育係。

小柄で一見少女のようだが本人が言うには大人のレディだそうだ、チョロチョロ動く姿はハムスターのようで可愛い。性格も明るくヒカリの面倒を面倒くさげらずみてくれる。



Seki Takuma
関 琢磨

若くして上官に上り詰めた天才。

頭脳もずば抜けていいが剣の腕も立つ城の女性の憧れの君。背が高くガッチリしていて綺麗な顔

立ちの男性で、軍人でありながら物腰は軟らかで堅苦くない。



Ryubi
龍美

ユーリスの王。

ユーリスが生まれたころから年をとることなく何百年も生きている。神の使いの龍の混血であり
神に

近い存在である。

月は沈み太陽が顔を出すころヒカリとジンは大河を船で渡っていた。

「良かったのかヒカリ？」

と舟の揺れに身を任せながらジンはマントにくるまり暖をとるヒカリの方を心配そうにみる。マントのせいでヒカリの表情は分からない。ヒカリは何かをずっと眺めていた。ヒカリの手には鳥の形のペンダントトップが太陽のヒカリを反射しキラキラと輝いている。

「どうしたんだそれ？」

ヒカリはマントのフードを外すと勢い良く息を吸う。

「気持ちいい朝ね。ジン、私は大丈夫よ。ずっと考えていたのこの世界と私の関係をこの世界は私に何をして欲しいのか、私は何をすればいいのか城で龍美が教えてくれたその時これを私に返してくれたんだ」

ヒカリは太陽が登っていく瞬間を食い入るように見つめる。

「あの後、王に会ったのか？」

「城を出る前に、龍美に聞いておきたい事があって」

「王はヒカリが城を脱け出すことを止めなかったのか？」

「龍美は、私がしたい事なら好きにすればいいと言ってくれたの私を信じていると」

ヒカリはペンダントトップを強く握り締める。

そう、龍美は太古の約束を思い出したのだ神との契約を・・・。

寢室を尋ねるとヒカリが来るのを知っていたかのように二つお茶が入った茶器が並んだテーブルに龍美は腰掛けていた。ヒカリは少し不思議に思ったが龍美に誘われるがままテーブルに着いた。ゆっくりとお茶をすする。暖かい、丁度いい温度のお茶だった。

「ヒカリ、私に聞いておきたい事があるんだろ？」

とまるでヒカリの心を見透かしたかのように龍美が微笑みながら言う。そのさいに左腕にあの鳥の形のペンダントトップが見える。

「あのそれって何処で手に入れたんですか？」

実は以前私も同じような物を持っていたことがあるんです。何だか不思議で、だって私がそのペンダントトップを持っていたのは私が元の世界にいた時なので」

龍美は手元で揺れるペンダントトップを見つめながら

「これかこれは拾ったのだ、いや手の中にあったと言うのが正解か昔月下が居なくなった封印の間で」

「じゃ、あの時月下と一緒にセブンスドアに」

「では、これはヒカリの物のようだな、これを持っていると白龍を感じる事が出来るのだこれを通じて私は白龍と繋がっている」

「では、白龍は私の世界に？」

「そうかも知れないだが決め手にかけるのだ、誰もヒカリの世界で白龍を見た者がいない以上」

「でも、神子に会えば分かるわ太下私やっぱり行ってみようと思います、この世界はそれを望んでいる」

ヒカリはリンと会った時に決めていたどんなことをしてもこの世界を守ると

「ヒカリすまない、私たちの世界のために君を危険な目に合わせてばかりだ」と龍美は少し肩を落とし表情を曇らせる。

「謝らないで下さいこれは私が決めたこと誰のせいでも無いんですこれは昔から決まっていた私の運命なんだと思います、月下と出会ったその時から・・・」

そうあの時月下と家の庭で出会った時から私たちの物語は始まっていた。気づくまで時間がかかってしまったけれど

「ありがとう。後、私の事は龍美と呼んでくれないか、ヒカリは家臣ではないのだからこの世界で数少ない私を名前で呼ぶ事の出来る友人だ」

「太下・・・いえ龍美分かったわ」

「まだ聞いた事があるんです月下の事で、私ずっと変な感じがしていたんだけど月下は闇と戦う時自分の血を刀に塗り闇を倒していた可笑しくない？だって月下は闇その物のはずでしょ月下の中には黒龍がいるのよ」

ずっと引っかかっていた何故、闇は月下を恐れるのか。

「不自然な事では無いのだよ、月下がその身に黒龍を止めて置けることを考えると彼は優秀な器だ、今までの月下達は黒龍をその身に宿し5年もしない内に亡くなっているある者は神経が狂い自ら命を断ちある者は黒龍の暴走によってそして暗殺されることもそんななか彼は10年以上その身に黒龍を宿しているが今も生きているそれは彼自身に黒龍を抑える力を持っているからだ」

「黒龍の器には力を持っている者がなるのですか？」

「セブズドアでは、ヒカリのように純血の者に不思議な力が宿る器はそうした者から選ばれる、混血の中にも恋歌の様に力を持つ者もいるが黒龍を受け付けられないのだ」

「じゃ、月下は純血なんですね」

龍美の表情が曇る。

「月下は、純血ではない混血なのだ白龍の・・・」

「それってどういう事ですか？」

「あれは、月下は私の孫にあたるのだよ」

「月下が王の孫！？どういう事なんですか！！」

「私は、ある人を愛してしまったそれは許されない行為なのだ私の子を作ることは龍の血を分ける事になるそうなるに龍の血は薄れ白龍の存在を危うくしてしまう、この世界を守るため禁じれていたが、私も器に過ぎない姿は変わらぬが中はずもうガタが来ていた、このまま神との約束を果たせず死んで行くのかとただこの世界を見守る事しか出来ずに・・・と思った時私は自分の存在した証を残したくなかったのだ、そして城の女官と恋をした駄目だと言う彼女を押しきって私は彼女を手に入れ証を手に入れたのだそれが月下の父親名を相馬と言う、相馬は皆に張れぬよう母親から取り上げ城の外で育てたそれが相馬にとって一番良いと思ったのだ私の様に城に閉じ籠り生きて行くよりも外で自由に生きて欲しかった、だがある日主祭が次の黒龍の器候補として相馬

を城へ連れてきたのだその時の主祭とは、相馬の実の母だったいつ頃からか彼女は、私を憎む様になってただか仕方がないことだ彼女は、相馬を私から取り返したかったのだその唯一の方法が彼を黒龍の器にし自分の側に置くことだった、白龍の血は黒龍の血を抑える闇と光は惹かれ合うもの拒否反応もない相馬は優れた器だったのだ、だが予想外の事が起こってしまった黒龍は相馬を受け入れず相馬に付き添ってた幼い月下に取り付いた白龍の血は相馬から月下に受け継がれていたのだ、幼い月下は黒龍を抑えることが出来ず暴走しそれを止めようとし月下の父と母は亡くなったのだ、相馬を殺したのは私だ彼女を止めることが出来なかった私の罪なのだよ」と龍美は、悲しそうな顔をし今にも泣き出ししてしまいそう辛い思い出なのだろう。

「じゃ、月下の中には白龍と黒龍が存在するのね」

「ああ、黒龍の方が割合は大きいがそう言う事になる、あの子はこの世界にとって特別な子なのだ神との約束を果たすために」

「ねえ神との約束って何なの？」

「それは・・・」

「そんな事があったのか」

とジンはヒカリの話を聞き終わるとため息をつく。

「しょせん王も人と言うことだな、一人では生きて行けない強いものほどそうなのかもしれないな、おっ着いたみたいだぞ」

ジンは手際よく船を川岸に付けるとヒカ리를陸に引っ張り上げる。

「さぁ行こう、ヒカリすまないが休んでいる暇はない日が高い内にジャングルを抜けないと獣に襲われるからな」

ジンは険しい表情でヒカリに言った。その後、ジャングルを指差し

「彼処だ、あれが抜け道になってる」

ヒカリがジンの指差す方を見るが道らしい道は見当たらなかった。

ジンは木や草をかき分けると其処には細い獣道が幻影の民は陸地を移動して暮らしているため知られていない抜け道を知っているのだ。ヒカリはジンの後に付いて行く鬱蒼と生い茂る草や木に行く手を阻まれなかなか思うように進まない地面も水を含み柔らかくなり足を取られる服は木や草に擦り泥だらけになっていた。それでも、ヒカリはジんに遅れまいと歩く。2時間ぐらい歩いた時だったジンは足を止める。

「ジンどうしたの？」

とヒカリが茂みの奥を覗くと底には少し瓦礫が転がっているだけで何も無かった木も草も何もない平地が広がっている。ヒカリは息を呑んだ。

「ここなのね」

「ああ」

とジンは淋しそうに呟く。

そこは、ヒカリがセブズドアに来て初めて目を覚ました場所だった。城は跡形も無くなり人の気配もないとても淋しい風景、風のみがその地を慰めている。ヒカリは自然と瞳を閉じる。

「行こうヒカリ、悲しむのは後だ何もかも済んだときにきっと」

そう言ったジンの瞳ははずっとその地を眺めている。考えないようにしても考えてしまう仲間のことを・・・名残惜しい気持ちを押し殺し二人は前に進む。

何とか日が沈まぬ内にジャングルを抜けることが出来た。ジャングルを抜けると小さい町に入るその日は野宿し夜が明けるとラオスの衣装をジンが何処からか調達してきた物に着替えた。町に出て情報屋がいると言う宿に向かう小さな宿の主人に案内され二人が部屋に入るとそこには、一人の老人が部屋の隅の椅子に腰掛けていた。

「あんたが、オシムか？」

とジンは用心深く探るように聞く。老人は、ちらっとこちらを見た後

「違う、鷲はオシムの代理だ名は」

と老人はジンに問う。

「名は、名無しの民」

その言葉を聞き老人の眉がピクリと動く

「名も無き旅人よ歓迎する、ようこそラオスへそしてサヨウナラだ！！」

と老人が叫ぶと部屋の中に何人かの刃物を持った男達がなだれこんでくる。

「こんな所までラオスの手が！すまないヒカリそう簡単には城まで行かせてくれないみたいだ」

ジンは、ヒカリを自分の方に引き寄せ男達を睨み付けながら言った。

「覚悟の上よ！気にしないで慣れてるから」

その言葉を聞きジンの顔が緩む。

「頼もしい相方で嬉しい、じゃいくぜ！！」

老人の号令と共に男達がヒカリ達に勢い良く襲いかかってくる。

ジンが二、三人の男を薙ぎ倒したが人数が多く裁ききれない二人が捕まるのは時間の問題だった。ジンのスキをみてヒカリの腕を男が掴みジンから引き離そうとした時だった。ヒカリの腕を掴んだ男が後方から強い衝撃を受けヒカリの方に倒れ込む。ヒカリはとっさに男の体を避け前を見るとそこには見慣れない若い男が立っていた。

「貴方は誰？」

とヒカリが尋ねるが男はその問いを遮り。

「行くぞ着いて来い！！」

「いくぞヒカリ！」

ジンは襲いかかってきた男を一人なぎ倒した後、ヒカリの腕を引き男の後に着いていく。

「抜け穴は！」

とジンが男に言うと。

「こっちです！」

と男は答えた。男が言う方を見るが抜け穴のようなものは見当たらない

「これか、助かった」

とジンは言うのとヒカ리를ひょいとかつぐと勢い良く壁に突っ込んで行った。ガバンと壁が傾きくると回転するとそのまま二人は通路を滑り落ちて行く。

「ジン！彼は大丈夫なの？」

「ああ、奴らを引き付け違う抜け道から逃げるだろう」

「着いたみたいだぞ」

ドンと鈍い音を立て二人は抜け穴の出口下の地面に落ちた。

「いてて、酷い出口だな後で文句言ってやらないと」

とジンは立ち上がりながらお尻をさする。

「ジ、ジン...あれ...」

とヒカ리는暗いトンネルの奥の蠟燭の光に照らされる人影を観ながら呟いた。声が震え瞳が揺れ視界がボンヤリし肩がふるえた。駆け出したいのに余りにも驚きと感激で立ち尽くしてしまう。ジンもヒカ리와一緒にただただ立ち尽くしているでもその手は固く握られ彼もまた瞳が揺れていた。そんな様子を見てか彼らの方から近づいて来る。

「ヒカリ様！」

と懐かしい声がヒカ리를呼ぶ。もう会うことは無いと思っていた。ふわりと優しい腕がヒカ리를包み込んだ。

「またお会いできてユリは嬉しゅう御座います」

ヒカ리는、その言葉を聞き我に帰る。これは幻ではなく現実である事を知り安堵した。

「私もですユリさん、生きていてくれてありがとう私嬉しくて」

わんわん泣くヒカ리를ユリは愛しいそうに見つめていた。ジンの前にも人影が近づき長く綺麗な銀髪をなびかせ膝枕づく。

「良くご無事でジン様、御側を長らく離れたことお許し下さい」

ジンはぐっと口元を結びじっとその光景を見つめる。ゆっくりと口を開き出した声は震える。

「ゆっ許す、よく生きて戻っただが二度は無いもう俺の側を離れるないなムイ、顔を上げろ追っ手がくる」

噛みしめるように言った言葉は素っ気なく簡単なものだったが熱がおびた声はジンの言葉では伝えきれない気持を感じ取る事ができた。

「ありがとう御座います、二度と御側を離れないと約束いたします」

と深々とムイは頭を下げた。ジンはその言葉を噛み締めるように聞いていた。

「では、早速ですが我らの隠れ家に案内させて頂きます」

再会の喜びも束の間ヒカリ達はムイの案内で隠れ家に向かった。幸いにも追っ手がくることなく無事に目的地に着くことができた。そこは、ヒカリ達が落ちたトンネルに繋がっていて大きな洞穴のようだった。隠れ家の中に案内されヒカリ達はまた驚いた。あの城で芸をしていた旅の一座がヒカリ達を出迎えたからだ。ムイに話を聞くとあの後、闇から逃れた者を集めラオスの手を逃れるために一緒に幻影の民の抜け道を使い逃げたのだとかその後はラオスの動向を探りつつ旅の一座として町を転々としていたそうだ。そんなおりジンの姿を見たと言う情報が入り迎えに来てくれたのだった。

「そうだったのか」

とジンは呟き皆を見た。

「よく無事でいてくれた礼を言う、これもみなオレの軽率な行動のせいだ償いはするだが今はまだやる事がある立ちどまってはられない許してくれ、早くアリアを探し白龍を見つけ出さないとこの世界は滅んでしまう、力を貸して欲しい」

話を聞いていた一座の長が

「あんたが謝る事はない、どのみち宴を台無しにした時点で我ら一座の運命は決まっていた、今生きているほうが不思議なくらいだあんただけの罪じゃないあんたが償うと言うのなら皆一緒だ、ここに居るものは生き前に進む事で償っているあんたもそうすればいい謝るな前に進め」

「そうです！ジン様、我ら幻影の民の生き残りも皆ジン様に着いて行きます」

ジンは皆の顔を見渡した後、

「オレは、今まで自分は独りで生きてきたと思っていた、母に捨てられ民にも受け入れてもらえず心に闇を飼って生きてきただが今は違う、オレは、皆に守られ皆に助けられ生きて来た事を知った、今度はオレが皆のために生きようと思う、よろしく頼む」

とジンは深々と頭を下げた。皆が歓声を上げジンの誓いに賛同する

「ジン様・・・」

とムイにいたっては涙ぐむしまつだ。ジンやヒカ리를歓迎し細やかな宴会が開かれた宴会と言っても粗末な夕食に躍りや歌が花を添える。それでも、ヒカリとジンの心を温かくし踊らせるには十分だった。戦いの前の細やかな宴皆と騒ぐ一時がとてもいとおしい明日には、この隠れ家を出て城に乗り込む事になっていた。

朝を迎え、ヒカリはユキに芸者の衣装に着替えさせられた。旅で付いた泥を洗い流し薄化粧すると久しぶりに自分が女の子に戻った気がした。最近のヒカリと言えば、水に落ちたり草をかき分け泥まみれになったりと女の子らしいことなど一つもなかった。

「お美しいですよヒカリ様」

とユキは、満足げに微笑んだ。

ヒカリは皆が荷造りするのを手伝おうとしたが皆の手際がよく逆に邪魔になっているのに気づきその場を離れた。隠れ家で唯一の外の景色が見える場所そこは中くらいの四角い穴が空いていて外の光を洞穴内に注いでいる。

「うわぁ眩しい！」

暗闇に慣れた目には外の光は眩しい過ぎたらしい。だんだん目が慣れてくると豊かな自然が広がりその間に町が転々と見える。其所から先はユーリスとは違い広い砂漠が永遠と続いていた。

「これがラオス砂漠の国」

「そしてあれが首都彼処にある城にアリアはいるきっと」

ジンがヒカリの側まで来て真剣な眼差しで城を見た。ユーリスとは違い土色をした重々しい城は少し不気味に見えた。

「ヒカリ紹介するよ彼女は、リリス今回の舞台の主役だそうだ」

ヒカリは、ジンの後ろから姿を現した少女に驚いた。ヒカリが以前国境の城で助け少女だった。

リリスは、ペコリとお辞儀すると

「あの時は助けて頂きありがとうございます御座いました、今度は私が貴女を助ける番ですヒカリ様」
ヒカリの顔色が変わる。

「ジンどう言うこと、芸者として城に入るとは聞いていたけど彼女達も連れて行くつもりなの？
危険よ！」

ジンが説明しようとするリリスが割って入った。

「ヒカリ様、これは我ら一座が決めた事です、私達もこの世界のためにお役に立ちたい私はヒカリ様のために何かしたいのです、それにラオスの王は私の躍りをご所望なのですよ私が行かなくては城に入る事は出来ません」

「ヒカリの気持は分かるが、リリスの言った通りだラオスの王はリリスの躍りを見る為に城に入る事を許した、リリスが来ていないとすればそれこそ騒ぎになる」

「ヒカリ様私達は大丈夫ですご心配なく私どもは芸者慣れております」

とニコリと以前の彼女とは違い落ち着いた笑をヒカリに見せた。もう、子供ではなと言わんばかりに。彼女は、一座のため家族の為に駆け足で大人になっていた。あどけなさは隠せないが少女ではなく立派な大人の顔してヒカリの前に立っている。

「リリス分かったは、私の負けね」

とヒカリは笑った。ヒカリの周りの人達は知らぬ間に成長していく皆強くなった。そして、きっとヒカリも・・・。

「行こう城へ」

皆がジンの言葉に言葉少なく頷いた。

城には、リリス達のお陰ですんなり入る事が出来た。城にある庭に設置された舞台裏にヒカリ達は案内された。

「ふー、無事に入れましたなあ」

と座長が一息付きながら言った。

「でも、これからどうするおつもりなんですか？」

ジンが会場を観察しながら

「宴が始まれば城の警備が手薄になるそこを狙ってアリアを探し助け出す」

「ですが、何処にアリア様がいるか分からないじゃ？」

「大丈夫だ、アリアを捕らえている場所は警備が厳重なはず逆に宴が始まっても警備が手薄にならない場所にいるということだ」

「なるほど」

と座長は、関心した。

「ジン私は、どうすればいいの？」

「ヒカリはここに残ってくれ二人で動くより独りの方が動きやすいからな、それにオレがもし捕まったとしてもヒカリがいればまだ希望があるムイヒカリを頼んだぞ」

「はい」

「縁起でもないこと言わわないで！」

「ヒカリだが万が一と言うことがある、もしオルが捕まったら一座と一緒に城から出るんだ約束だ」

「ジン・・・分かった出来るだけそうする」

とヒカリは返事を濁した。

一座の者は、舞台の用意の為に持ち場に行ってしまう気づけばそこにはヒカリとジンだけになっていた。あの夜の続きのような光景。自然とジンはヒカリを見つめる。

「ヒカリ、オレは幻影の民の為に生きようと思う残りの人生を賭けて先代達がしてきたように、だからヒカリとは一緒に行けない・・・」

あの夜交わした約束。今度逢うときには返事を聞きたいそう約束した。

「知ってたは前からジンの一番は、でもあの夜言ってくれた言葉はとても真剣で真っ直ぐで嬉しかった、ありがとうジンそしてご免なさい、私もジンとは一緒に行けない私にも守りたいものがあるから・・・」

「そっかあ」

とジンは静かに呟くとヒカリを抱き締めた。ヒカリもそれを受け入れる、だがそれは甘いものではなく同じ想いを持つ者どうしがお互いを認め合うような誓いの儀式。

「ヒカリが好きな事それは本当だ、今までで一番オレの心を揺らしているけど連れては行けない」

「ジン・・・」

名残惜しいそうにジンはヒカリから離れると行ってくると一言いい城の中に消えて行った。

ヒカリは、ジンの背を見えなくなるまで見送ると一座に加わった。

リリスは、出来上がった本番前の舞台上で舞を踊っている。とても優雅で可愛らしさの中に気品が漂った舞。作業している者や警備の兵達も仕事を忘れリリスの舞に目を奪われる。リリスは舞を終え舞台から降りてくる。

「凄い！リリス」

とヒカリは興奮した様子を見てリリスは恥ずかしいようにニコリと笑った。

物静かで舞いと一緒で凛とした立ち振舞い一座の花形であるという誇りと自信それは何が起こっても揺るがないリリスの心そのままに全部がリリスの魅力であり皆を引き付ける。

「リリス！はいこれ」

とリリスが舞台から降りてくるのを待ちわびていたかのように少年が手ぬぐいを手渡した。

「ヤンありがとう」

少年は少し照れながら笑いリリスが椅子に腰掛けるのを見て満足げに仕事に戻って行った。

「リリスあの子は？」

「あれは、ヤンと言って幼馴染みなんです、いつも私を気遣ってくれて私もヤンも孤児だからかもしれません昔からお互いを支え合って生きてきました」

「家族なんだね」

「ハイ、一座の皆私の家族なんです、だから今は淋しくありません」

よく見るとリリスの手や足には沢山の小さな傷跡があった沢山の頑張った証がそこにはあった。家族の為に自分のためにリリスは必死に生きている。

私は、元の世界で家族の為に何かしたことがあったらどうか？

何かする前に逃げ出してしまった。家族からも学校からもそして、先輩からも・・・。

何も手の中に無かった当然だった自分で置いて来たのだから・・・。

リリスは小さな体で沢山の家族を守ろうとしている。だから、どこまでも清く美しく彼女を魅力的に魅せる。

とても、羨ましい・・・。

とヒカリは思った。私も欲しいとそれは、本当は間違っているのかも知れない。きっと今度会うときには、背を向けたりしないで向き合いたい。自分が少しずつではあるが強くなってきているのを感じる。

ゴーンと宴の始まりを告げる低いドラムの音が会場に響き渡った。座長はヒカリを舞台裏のなかでも会場がよく見える場所に案内した。側近を連れルドルフの王らしい恰幅が良く豪華な装飾がほどこされた衣装を身に纏った男が入ってくる。その後ろを少年が白い虎を連れ歩く虎の世話係だろうか？だが、その男はヒカリの予想に反して王が座るであろう椅子を通り過ぎその横で止まった。代わりに座ったのは男の後をちょこちょこ歩いていた少年だった。

「うそー！あれが王様！？」

ヒカリだけでなく一座の皆が驚き固まっていた。

「まだ、お若いとは聞いてはいたが・・・」

と驚きを隠せない。

少年は、どすっと雑に椅子に腰掛けると気だるそうな表情を浮かべ舞台を眺めている。その足下には白い毛の虎が寝そべり上等な毛皮の絨毯のようだった。王は、一通り会場を見渡すと側近の男に

「おい、アラクの姿が見えないがどうした？奴が今回の宴の主催者であろうが姿を表さないとはどういう事だ、余は暇ではないのだぞ」

「ハイ、今探しているのですが」

「余を待たすとはいい度胸だなあアラク」

王の視線の先には長いウェーブがかかった赤い髪を優雅になびかせ悪びれることなく近づいてくる男がいた。その男は優雅に王の前に膝を着くと

「申し訳御座いません、城内に鼠いえ猫が一匹うろうろしていたもので」

「ほー、余を待たせたのだ捕らえたのであろうなあ」

「ハイ、地下廊に」

まあよい、早く宴を始めろ余が退屈する前に」

「はい」

王とアラクが何か話しているが遠く離れた舞台裏に身を潜めているヒカリ達には聞こえない。アラクは一礼すると手を振り始まりの合図をする。すると、会場にドラムの音が鳴り響く。

「ヒカリ様！あの男！？」

ムイがアラクを見てまゆを密める。

「ムイさん知ってるんですか！？」

「はい、不気味な男ですあの惨劇の夜に急に現れ霧のように消えたのです私の目の前で・・・」不思議な術を使い闇を操り何でも見透かしているような言動やその容姿の美しさがより彼を妖しく不気味に見せている。きっとここに来ればまた会えると思っていた。彼は、何か知っているこの世界の事やヒカリの事を。

宴は進みリリスの舞が始まった。相変わらず王はつまらなさそうな顔をしほうずえを付いている。

舞が終わるといっせいにに歓喜の拍手が鳴り響く。

「見事な舞だった」

と皆がリリスの舞に酔しれた。だが唯一王は面白くなさそうに舞台から視線を反らす。

リリスは座長と一緒に王の前に出る。

「本日は、お招き頂きありがとうございます今日の舞台楽しんで頂けたでしょうか？」

と座長は緊張した様子で恐る恐る挨拶した。

「お前には、余が楽しんでいたように見えるのか？」

相変わらず王は面白くなさそうな顔をしリリス達に視線を送ろうともしない。会場には冷やかな

空気が流れる。

「では、どんなものがお好みなのでしょうか？」

「ほ～、まだ余に退屈な芸を見せようと言うのか！？」

王は初めてリリス達の方を見た冷たい視線で獣が獲物を吟味しているといった感じでリリス達は肩をすくめる。

「さっきも言ったが余は暇ではないのだ、今度面白くないものを見せてみろそなたらの身の安全は無いと思えその命を賭けて余を楽しませる覚悟があるのだな」

リリス達は身震いした。子供だというのに王の威厳は本物だった。

だが、ここで引くわけにもいかないことは分かっていたどちらにしろ王を納得させなければリリス達は無事に城を出る事は出来ないだろう。

「何だ、早く初めないか！？それともネタ切れか？この王の前で！！」

「そんな事は！！」

と座長が慌てて声を上げるが王は見下すような笑みを口元に浮かべる。

「迷っているなら私の好みを教えてやろう恐怖に怯え命をこう者の断末魔をご所望だ！！これ以上興奮するものはない恐怖と憎悪光など一切ない闇をさぁ食事の時間だいけ白虎！」

「陛下！」

「うるさい！黙って見ている王は私だ」

と側近が止めるのを王は聞かない。白虎がゆっくりと腰を上げると皆が息を飲んだ瞬間だった白虎は獲物に向かって走り出す。会場を威嚇するように一周し獲物を吟味しているようだった。

「ヒカリ様こちらへ」

とムイがヒカリを連れ逃げようとする。

「でも、リリスが！！」

会場の真ん中にまだリリスと座長は動けず留まっていた。

「ムイさん、先に皆を避難させて下さい、私はリリスを助けに行きます」

ヒカリは止めるムイを振り切り舞台を下りていった。その後を、ヤンが追って行く。途中、丸腰の自分に気づき舞台で使う小道具の弓を背負いリリス達の所に急ぐ。

白虎は獲物を決めたらしくリリス達の前で来ていた。じりじりと間合いを詰めていく。

「陛下おやめ下さい、この様なこと民に知れては王の威厳にかかります！！」

「良いではないか、それこそ皆我に恐れをなし反逆する気も失せるというものだ」

「陛下！その様なお考えは国を滅ぼしますぞ！！どうかお考え直し下さい」

「うるさい！黙って見ているお前も楽しめカンイ、毎日子供のお守りは大変である私からの褒美だ！！」

「陛下・・・・・・私は・・・・」

カインはアラクを見る。彼は、顔色変えず会場の様子を観察していた。その口元には薄っすらと笑みを浮かべている。

「アラクをお前！！こうなると知っていて宴を・・・・」

扇で口元を隠しくスクスと笑いながら

「さあね、でもさっきより僕好みであることは事実だね」

「貴様！！お前の思惑どうりにさせるものか！！」

カンイは、剣を手に持ち会場に下りていく。

「間に合うものか！！」

と王は鼻で笑う。

会場では、白虎がリリス達を見据えて今にも飛び掛ろうとしていた。白虎の前足が跳ねてその爪がリリス達を目掛けて振り落とされた時だった。白虎の足に矢が刺さり白虎は悲鳴を上げ後退する。だが、白虎は矢を引き抜くと怒りにまかせて再びリリス達に襲い掛かる。ヤンが白虎の前に飛び出し白虎を迎え撃つ。

「ヤン！！」

リリスはヤンを案じて身を乗り出すが座長がそれを止めリリスを連れて舞台の方に走り出す。ヤンの剣が白虎の爪をなぎ払い応戦するが力の差は歴然だった。白虎はヤンの剣に喰らい付き力に任せてヤンの手から剣を奪い取り剣を遠くに投げ捨てる。ヤンは剣を奪われ打つ手がなくじりじりと間合いをつめられ今にも飛び掛ってきそうな白虎を見て後ずさりするが足が纏れその場に尻餅を付いた。白虎がヤンの腕に喰らい付くヤンの体は猛獣の力に圧倒され上下に激しく揺れる。ヤンの腕を食いちぎる勢いだった。だが、白虎の体に衝撃が走るカンイが白虎がヤンに気をとられている間に近づき切りつけたのだ。白虎はたまらずヤンを放り出し痛みに顔を歪める。

「何をしている白虎！！早くしとめないか！！」

と王の声が会場に響くと同時だった。パンと大きな音を立て王の頬に衝撃が走る。

王は、赤く腫れた頬をかばいながら自分におきた出来事を信じられない様子で少しの間沈黙する。他の皆も同じだった。我に返った王は、自分を打った犯人を睨み付ける。

「貴様！！」

そこには、王を見下げ立っているヒカリの姿があった。肩でまだ息をしそれでも王を食い入るように見つめている。白虎に矢を放った後、全速力で王のもとに走ってきたのだ。兵が、騒ぎに気をとられていたお陰で誰にも邪魔される事なく王のもとまで辿り着く事ができた。側近のカンイも今は王の側を離れている。

「早く止めさせなさい！！さもないとまたぶつわよ！！」

とヒカリは腰に手を当て一国の王を子供をしかるように言った。赤く腫れた頬を王はさすりながらヒカリを睨み付ける。

「ふざけるな！！誰に向かって言っている女、何をしているアラクこの女を早く捕らえろ！！」

アラクの腕がヒカリを捕らえる。

「また会ったねお姫様」

とアラクはヒカリに微笑んだ。

「放して！！」

ヒカリが力一杯抵抗するがアラクの腕から逃れることは出来ない。

「お姫様、あまり暴れるとキスするよ」

とアラクがヒカリの耳元で囁いた。ひっ！とヒカリは悲鳴を上げ抵抗するのをあきらめた。どん

な苦痛よりもそれは御免だった。アラクは、肩を少し落とし残念そうな様子で

「そんなに僕のキスが嫌なのかい自身なくすなあ」

とクスクス笑った。本当にそう思っているのかどうか誰にも分らなかった。

「アラク顔見知りのようだが、その無礼な女は何者だ」

「はい陛下、この者が陛下がご所望のユーリスの光の者で御座います、これが今回の宴に私が用意した花いかがですか」

とアラクは得意げに言った。

「アラク！余を騙したのだな」

「最近、あんまり陛下がつまらなさそうにされていたので」

とニッコリと悪びれる様子なく王に微笑む。

「お前と言う奴は、まあ良い本当にその者が光の者だと言うのなら証拠を見せてみよ！！出来きまい苦し紛れの嘘はよすのだな」

「君できる？」

とアラクはヒカりに聞いてくる。

「出来るわけないでしょ！！」

「だよね」

ヒカリはアラクの言葉に拍子抜けしがくりと肩を落とす。

なんなのこの人！！と心の中でヒカリは大きな声で叫んだ。

「まあそう言わずに少しの間この女を側に置いてみては如何ですか？退屈しのぎにはなるでしょ」

と言われ王は不服そうな顔をしたまま椅子から立ち上がると。

「好きにしろ！！白虎いくぞ」

と言われえ白虎は獲物を名残惜しそうに見た後、傷ついた前足をかばいながら王と共に城に消えていく。

その後、ヒカリ達はラオスの兵に捕らえられヒカリ以外は地下牢に入れられた。

カンイは、兵達の指揮を終えアラクを見つけると

「どう言うつもりだアラク」

「何のことですか？」

「あまり王の心乱すなこれ以上可笑しな事をすればその命無いと思え！！」

カンイはそう言うと王の後を追って城に消えていく。

「おお怖、まあいいこれでユーリスの光は私の手の中」

とアラクは不気味な笑みを浮かべた。

城内に潜んでいたジンは、兵士達が宴の会場に急ぐ姿を見送っていた。兵士達が通り過ぎると城の奥へと進んで行く。思った通り城内は警備が薄く動きやすかった。ムイに渡された城の見取り図を開いてみる。幾つかエリアがあるであろうと思われる場所に印が付いていた。予めムイとエリアがいそうな場所を検討したが地図だけでは矢張り切れず複数の印が付いていた。

「多いなこれ全部を回るのは無理だ絞らないと」

とは言っても何処にエリアがあるのか検討もつかなかった。城内の様子を観察し警備が厳重な場所から調べて行こうかと思っていたが会場以外で警備が厚い場所を確認する事は出来なかった。ジンは物影に隠れ城の様子を伺っていると赤毛の男がジンの前を通り過ぎる。宴がもうすぐ始まるというのに会場とは逆の方へ歩いて行く、ジンはその男の後を追って城の奥へと進んで行った。

男は、城の北の端にある古ぼけた鉄製の扉の前で足を止めた。重々しく冷たい印象の扉が男が来た事を知りゆっくりと開く、ジンの所からでは顔は分からなかったが白い衣装を身に纏った男が立っていた。その男は赤毛の男に一礼すると一緒に扉の奥に消えて行く。ジンは、閉じてしまった鉄の扉の前で行くと目を疑った。その扉には、見知った紋章が刻まれていたからだ。紋章は、小さく扉の端に刻まれていてうっすらと浮かんでいる過ぎして来た年月が伺える。幻影の民でなければただの扉の飾りだと思い見過ごしてしまうだろう。

「こんな所に社があるなんて」

ジンは、紋章を手でなぞる無くした物を見つけた安堵感あった。

「この先にきっとエリアがある」

扉には、取っ手などは無かった。ジンは扉の前で何かを呟くと扉は自然と開いていく。その呪文は、代々幻影の民の当主に受け継がれてきたものだった。この言葉をこんな場所で口にするととは思わなかった。

ラオスこの国は、宗教の信仰は禁じられていた。神を裏切った人がつくった国だからだ。ラオスの王は、神を裏切りユーリスから独立し人の国をつくった。それを先駆けに次々と人はまた、自分の理想郷を求めて私利私欲の為に争いを始めたのだ。ラオスは、神を信じることを禁じ人を崇める国をつくったラオスの民にとって神は王なのだ。そのためジン達がラオスに捕まってから信仰に必要な神器など押収されていた。神を信仰するものは人ではないそういう国だった。そうする事で自分達考えを正当化しているのだ。そんな国に社があること事態が滑稽だった。それも、象徴である城の中にひっそりとそれはあった。

地下に続く階段を音をたてないよう慎重に降りて行く。階段を下り終わると其所には何本もの赤い柱が立っていて中央に御神体の鏡が置かれ魔法陣が蠟燭の明かりに照らされ床に浮かんでいる。だがその魔法陣に黒い絵の具のようなシミが彼方此方に見られた。よく見ると壁にもそのシミは見られ何かの儀式の後のような光景だった。近くにあった蠟燭の明かりで黒いシミをよく観察するとまだ新しいと思われるものは少し赤みをおびていた。

「難だよこれわ・・・何をやっているんだ父上！」

ジンの呼びかけに人影が反応する。ゆっくりとその人影は白い儀式用の衣を纏い幻影の民の現当主ユバはジンの前に姿を現した。

「きっといつか来ると思っていたよジン、お前が国境の城から消えたと聞いた時から、いや本心と言うとっそ死んでいてくれればとも思っていたお前はきっと私の邪魔をするだろうからね、それにしてもどこで気づいたんだ私がいると」

「あんたが今着ているそれは幻影の民でも当主が祭典や儀式の時のみに着ることが許されるものだ、そんなものを着てここでなにをしている！！それに、この血で汚れた魔法陣はなんなんだ！！」

ユバは、冷笑を口元に浮かべ。

「本当は分かっているんだろ？ここで何が行われているのか！？」

「アリアはどこだ！！まさかアリアを生贄に捧げたんじゃないだろうな！」

ユバが、ゆっくりとした歩行でご神体の前まで来ると床の魔法陣が発光し鮮やかに浮かび上がる。

「そのまさかだと言ったらジンお前は私をどうするんだ？」

ユバはジンが返答出来ずにいるとからかうような態度で続ける。

「何も出来ない癖に首を突っ込むなこの出来損ないが！！」

「信じていたずっとずっと貴方の言葉を・・・」

母に憎まれ産まれて来たことを後悔した事もあった。だがあの日父は自分が愛した人を手にかけてまでもジンを守りジンを認めくれた。そんな人が今度はジンを否定する。幼い頃のジンの全てが音を立てて崩れていく。

「嘘だ！嘘だと言ってくれオレの事はいいだが何故アリアを殺した！いったいここで何をしているんだ父上！聖域を守るのが我ら幻影の民の仕事だろ」

ふんとユバは鼻で笑う。

「ジン、聖域とはどんなものか知っているか？ユーリスの城の奥深くにある闇を司る封印の間、光を司る幻影の民の隠れ里の聖域は同じものだ性質は異なるがどちらも神の世界とセブンズドアを繋ぐ入り口なのだよ、だがある日我らの聖域に闇が忍びこんできたのだ光を司る聖域に世界の天秤は滅びに傾き闇はアリアを呑み込みさらっていった神は、この世界を滅ぼすことが正しいと私たちに示している人は禁を犯しすぎた約束の期限が来たのだよ、私は神に従うそれが幻影の民の当主の務めだ」

ユバが御神体の鏡を手にとるとそこから黒い煙のよなものが溢れでる。

「ふざけるな！なにが当主の務めだあんたは民を放り出し闇を恐れ逃げ出したんだ、あんたがいなくなった里がどうなっているのか知っているのか皆あんたを信じていたのに・・・こな所に隠れ闇を飼っているなんてあんまりだ、オレはどうしたらいい父上」

闇に溺れた父親を前にしてもジンは問わずにはいれなかった。尊敬していた民からも身内からも慕われる厳しいが優しい父を失いたくなかった。戻れるなら昔のようにありたい。それが本心だった。

「ジンまだ私を父と呼ぶのか前は甘いな私はお前らの親ではもうないのだよもう遅いのだ何もか

もが、人は私の言葉に耳を傾けようとはしなかったこのままでは世界が滅んでしまうと何度も訴えたのに、だが神は私に答えそして道を私に示したのだ！これが私の答えだジンお前も神に従い神の糧となれ！！」

御神体から濃い霧のような闇がユバを包み込むと体に入り込み心の闇にとりつき喰らう。みるみるユバの体は闇に犯され化け物えと姿を変えた。皮膚は黒く変色し硬くなり黒光りしている髪は抜け落ち代わりに幾つもの小さな角のようなものが生え体から蒸気が迸っている。

「父上！！貴方と言う人は・・・闇よオレはお前達を許さない例え神であったとしてもだ、人の心の闇にとりつき惑わし狂わせ破滅へと誘う、父上は志高く勇敢で優しい人だったそんな人をよくもこんな姿にしたな許さない」

ジンが化け物とかしたユバに剣を構えた時だった。

「何を許さないって」

柱の後ろからアラクが突然扇で口元を隠しながら現れる。扇をアラクが口元から遠ざけると美しいアラクの顔に不気味な笑みが浮かぶ。悪魔は人を誘惑するため美しい容姿で現れると言う。いたずらに人を惑わす悪魔そんな表現がアラクにはしっくりくる。

「ねえ～ユバ君の息子は行儀がなっていないんじゃない？勝手に城に入り込み人の秘密をコソコソ嗅ぎ回ってイケナイ子だ罰を与えないとねそう君も思うだろ？」

アラクは子供の頭をなでるように化け物とかしたユバの頭部をなでる小馬鹿にしたような仕草がジンの心を乱す。

「ふざけるな！お前がオレをここに誘い込んだんだろいったいお前は何者だ何がしたい、ムイがお前を国境の城で見たと言っていたそれにヒカリが拐われた時もお前は現れた闇を操るすべを持ち人を化け物に変える何が目的なんだ！！」

「目的？そんなもの僕にはあって無いようなもの悪魔だからね、しいてゆえば世界の破滅かなあ、でも直ぐに終わってしまうのは困るんだよ退屈してしまうだろ手の中で転がして殺さず生かさず楽しめれば僕はそれでいい死か生か選ぶのは君たち人間だ僕じゃない」

人を嘲笑うように言うアラクの言葉は悪魔そのものだった。ただ自分が退屈せずいられればそれでいい。アラクにとって人とは子供の玩具飽きない程度に遊ぶ長く楽しむために。アラクの隣で化け物が唸り声を上げブルブルと体が震えだしていた。急激な変化に体が耐えられなくなってきていた。

「もう、限界みたいだね僕もそろそろ行かないと主に怒られちゃうじゃ頼んだよユバいや化物」

「待て！話はまだ終わってないアリアはどこにいる！！」

アラクはジンのを無視しその場に溶け込む様に消えて行った。

「くそ！」

アラクが消えると同じに化け物とかしたユバがジンに襲いかかる。即座にジンは身を引き後方に飛び体制を立て直す。

「くそ！こんな事になるなんて父上、今楽にして差し上げます」

ジンは、剣を構え直し飛びかかってきたユバを交わし後方に周り込む急激な体の変化に耐え兼ねたユバの体が動きに付いて行けず膝から崩れ落ちる。

「父上！！」

ユバの背中に剣を振り落とそうとするジンの瞳が揺れるだが直ぐに強い意志が瞳に宿り剣を迷い無く振り落とす。ユバの背中から大量の人とは違う黒い血が吹き出しジンの顔を汚すがジンは何も感じない様子で瀕死の状態のユバに剣を突き立て止めをさした。呆然と立ち尽くすジンの瞳の端から黒い筋が流れ落ちる涙なのかただ顔に付いた血が流れ落ちたのかジンにも分からなかった。

「行けジン、アリアはまだ生きている」

息絶えたと思っていたユバから声が聞こえてくる。

「父上！まだ息が！！」

ジンはユバの元に駆けよりユバを抱き締める。

「すみません父上・・・」

弱々し口調でユバは答えた。

「謝るなジン、お前は正しい謝るのは私の方だお前に辛い思いをさせてしまったすまない、不甲斐ない父を許してくれ」

震える手でユバはジンの頬に触れる。

「ジン、私は民をお前達を愛していた何とかしたかったのだ壊れていくこの世界をだが私ごときの力ではどうすることもできず絶望したそんな時間が私に取り付いたのだ、ラオスこの国もまた闇にとりつかれている救ってやってくれアリアをこの国を・・・」

「アリアは生きているんですね！！」

「ああ、アリアを見つけ出してやってくれ前が来るのをきっと待っているジン己を信じて進むのだ愛しい我が息子よ幻影民一族を頼んだぞ・・・」

と言うと幻影の民当主ユバは息を引き取った。

ジンはその場を離れずただユバの体を抱き締め動こうとしなかった。暫くして、力無く腕のなかで眠るユバを抱き抱えゆっくりと立ち上がると御神体の前まで行きユバの体に火を放った。徐々にユバの体は灰になり形ない物になるジンはそれを袋に詰めると部屋の棲みに見つけた城の奥へと続く扉の向こうに消えて行った。

誰も居なくなった空間にただ残り火の煙りだけがただ漂っていた。父と息子の別れを惜しむかのように・・・

あとがき。

モカです、毎回お久しぶりです。

ほぼクライマックスまっしぐらなのですがなかなか終わりませんね……。

月下なんてちっとも出てこないし、最近誰が主役なのか分らなくなっていますね。

今回は、VIとなっていますがVI上といったところでしょうか。表紙作ってから本文書いたので修正がめんどくさくて……。

つぎは、月のヒカリVIIで会えることを願います。

月のヒカリVIにお付き合い下さりありがとうございます。

モカ

月のヒカリⅥ

<http://p.booklog.jp/book/34583>

著者：モカ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/retoropot/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/34583>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/34583>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.